

氏名（本籍）	山波 真理（ 茨城県 ）
学位の種類	博士（保健医療科学）
学位記番号	博甲第 35 号
学位授与年月日	令和 2 年 9 月 3 0 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	保健医療科学研究科
学位論文題目	妊娠糖尿病既往女性の健康行動モデルの構築

学位審査委員

主査	茨城県立医療大学教授	博士（医 学）	山口 忍
副査	茨城県立医療大学教授	博士（保健学）	藤岡 寛
副査	茨城県立医療大学教授	博士（保健学）	浅川 育世
審査員	社会医療法人社団 光仁会 総合守谷第一病院	博士（医 学）	佐々木 純一

論文の内容の要旨

【背景】

妊娠糖尿病（gestational diabetes mellitus:以下 GDM）は、母児の周産期予後に影響するだけでなく母体の将来の糖尿病(diabetes mellitus:以下 DM) 発生の予測因子と考えられている疾患である。しかし、GDM 女性への産後の DM 予防のための具体的な介入の方法は未だ確立されていない。DM は生活習慣病でもあり、予防や早期発見には当事者の主体的な健康行動が最も重要かつ有効である。しかし産後は育児負担等から健康行動が困難になることが知られている。GDM 既往女性への介入の方向性を明確にするために、GDM 既往女性の特徴を踏まえた健康行動モデルを構築することが有用である。モデルの構築は GDM 女性の健康支援のための効果的な介入プログラム開発への足掛かりになる可能性が高い。

【目的】

本研究では、支援者が育児期にある GDM 既往女性の健康行動を理解するための健康行動モデル構築を最終目的とする。そのため、以下 3 つの下位目的を設定した。目的 1. GDM の診断を受けてから産後に至るまでの GDM に対する認識と健康行動の変化のプロセスを明らかにする。目的 2. 当事者の体験を記述し、GDM 既往女性の育児をしながらの健康行動への取り組みに影響する要因を抽出することを目的とする。目的 3. 育児中の GDM 既往女性の健康行動への影響要因の構造と、それらの要因と健康行動との関連を明らかにし、GDM 既往女性の健康行動モデルを作成し、検証する。

【方法】

第1研究：研究目的1について産後1か月のGDM既往女性にインタビュー調査を行い、GDMの診断から産後1か月までのGDMに対する認識と健康行動の変化のプロセスを質的に分析した。

第2研究：研究目的2について、乳幼児を養育中のGDM既往女性へのインタビュー調査によって、育児をしながら健康行動に取り組む体験を質的に分析した。

第3研究：第2研究の結果を基盤として質問項目を作成し、乳幼児を養育中のGDM既往女性を対象にアンケート調査を行なった。アンケートの結果を解析し、GDM既往女性の健康行動モデルを構築した。

すべての研究は、茨城県立医療大学倫理委員会の承認を得て実施した。

【結果及び考察】

第1研究：GDM女性は、妊娠中はGDMを胎児に悪影響を及ぼす疾患と捉え、食事療法を最重要視して健康行動に取り組み、分娩後は妊娠中の最大の不安が解消されることで、それまで潜在化していた将来の糖尿病発症リスクへの関心が高まり、自分と家族の健康を作る食生活の再構築を目指していた。産褥期のGDM女性には、この食生活の再構築を支援する関わりが重要であることが示唆された。

第2研究：《自分の健康状態の受け止め》《健康行動の実践に影響する家族の存在》が食生活と耐糖能検査受診の両方に影響していた。食生活は、《日々の生活との折り合いをつけながらの健康的な食事の継続》であり、検査の受検は《コンディションが整うことで現実的になる検査受診》であった。それぞれの健康行動に影響する、心理的負担、肯定的な意味づけ、現実的課題が抽出された。GDM女性は《共感者のいない産後のGDM》と付き合いながら健康行動に取り組んでいた。

第3研究：「健康的な食生活」への影響要因として6因子が抽出され、時間的余裕、肯定的な意味づけ、家族の理解、気持ちのゆとりが「行動意図」に影響を与え、気持ちのゆとりと「行動意図」が「行動」に影響していた。「定期的な耐糖能検査の受検」への影響要因として4因子が抽出され、必要性の認識と心理的負担感、肯定的な意味づけが「行動意図」に影響し、「行動」には「行動意図」が影響していた。これらのモデルは一定の適合度指標が得られGDM女性の健康行動を理解するための健康行動モデル構築に至った。各健康行動への影響要因をターゲットとした介入が、健康行動の促進に寄与する可能性が示唆された。

【今後の課題】

今回構築されたGDM既往女性の健康行動モデルは一般化に限界があるため、今後はデータサンプル数を増やして、さらにモデルを洗練させ、具体的な介入プログラムの開発につなげていくことが課題である。

【結語】

育児中のGDM女性の健康行動とその影響要因との関連を検証して健康行動モデルを構築した。モデルは、当事者が自分の健康行動に伴う課題を整理し、自覚することに有効であり、保健医療従事者が、当事者の健康行動促進に必要な支援の方向性を検討するためのツールとして活用可能であると考えられた。

審査の結果の要旨

本論文の最終審査は公開審査として、令和2年8月11日に研究発表と質疑応答を行った。その後、主査・副査2名・外部審査員1名により本研究課の指針に従い1) 創造性・新規性 2) 専門領域との関連性 3) 論理性 4) 信頼性・妥当性 5) 論文の表現力 6) 倫理的配慮の6項目の視点で協議を行った。以下に審査結果の要旨を述べる。

本研究は、母性看護学領域の医療での狭間にある体制の整備が不十分である妊娠糖尿病既往女性へのフォローに着眼しており、学際的にも価値ある研究である。3つの調査で構成されており、本学の倫理委員会の承認を得て必要な倫理的配慮がなされていた。それぞれの調査では成果があるのだが、3つの研究の関係性について説明が不足しており一貫性に欠ける点がみうけられた。第1.第2の質的研究は目的に沿って適切な分析手法を用いていた。第3研究は共分散構造分析で結論を導いていたが、対象者数が少ないため信頼性に欠けている点、最適モデルに至るプロセスの説明が不足している点の改善が必要である。また最終考察において、今回参考とした計画的行動理論と本研究で示した新たなモデルについての違いや、新しいモデルの特徴や有用性を含み解釈が不足しているため、新しいモデルの価値を十分に示しているとは言い難く更なる考察が必要である。健康行動モデルの内容をさらに生活全般に広げることでより洗練された健康モデルとしての価値が高まり、当該領域での学問的発展が期待できる研究であった。一部、誤字脱字や文言の間違いがあり推敲が必要である。

最終審査時における、研究者の明瞭なプレゼンテーションと、ディスカッションにおける落ち着いた真摯な態度は、研究者として欠かせない要件であり継続した研究に大きく期待できる。

審査員4名の審査により本論文は、保健医療科学専攻に相応しい研究であり、母性看護学の発展に寄与することが期待できるため、博士論文として適切と判断し「合格」とした。